

「親鸞と現代 第Ⅰ期」 第四回

同朋大学教授 中 村 薫

今回は「親鸞と現代」というテーマをいただきまして、七人の教員がそれぞれの立場から自由にお話をさせていただくということで、今回は私の当番であります。今日は、親鸞聖人の若い頃の苦悩、あるいはどのような生活をされていたのかについて、少しお話をさせていただきたいと思います。

金子大栄先生が作ってくださいました「親鸞讃歌」という歌がございます。今年度は親鸞聖人七五〇年の法要を勤めさせていただきます。三月一日からお勤めさせていただく予定でしたが、三月一日に東北地方を中心に地震や津波がございまして、急遽、御遠忌を被災者の方たちに心を寄せてお参りしようという形で進められてまいりました。その中で私の脳裏に浮かんできたのが、金子先生の「親鸞讃歌」という歌でございます。拝読させていただきます。

中村 薫

昔 法師あり

親鸞と名づく

殿上に生れて庶民の心あり

貧道となりて高貴の性を失わず

己にして愛欲のたち難きを知り

俗に帰れども道心を捨てず

一生凡夫にして

大涅槃の終りを期す

人間を懐かしみつつ 人に昵む能わず

名利の空なるを知り 離れ得ざるを悲しむ

流浪の生涯に 常楽の故郷を慕い

孤独の淋しさ 万人の悩みを思ふ

聖教を披くも 文字を見ず

ただ言葉のひびきをきく

正法を説けども師弟をいわず

ひとえに同朋の縁をよろこぶ

本願を仰いでは

身の善悪をかえりみず

念仏に親しんでは

自ら無碍の一道を知る

人に知られざるを憂えず

ただ世を汚さんことを恐れる

己身の罪障に徹して

一切群生の救いを願う

その人逝きて数世紀 長えに死せるが如し

その人去りて七百年 今なお生けるが如し

その人を憶いてわれは生き

その人を忘れてわれは迷う

曠劫多生の縁

よろこびつくることなし

今からちょうど五十年前、新潟県ご出身の金子先生が、ご親戚の家へこの歌を書いて送られました。それが残っておりまして、みなさんに読んでいただいております。ちょうど五十年前が親鸞聖人七〇〇回御遠忌でございました。みなさんの中で七〇〇回御遠忌にお参りされた方はおみえでしょうか。五十年前というと、今、七十歳の人でも二十歳ですから、二十歳となるとまだ仏法にご縁がなかったかもしれません。もちろん私も今六十三歳ですので、五十年前は十三歳ですから、ほとんど記憶にございません。

さて、金子大栄先生が五十年前に、親鸞聖人七〇〇回御遠忌法要をお迎えするにあたって讃嘆された歌が、今拝読した歌であります。

「その人を憶いてわれは生き　その人を忘れてわれは迷う」。私たちは分別とソロバン勘定に走って、そこにとらわれている間は、親鸞聖人の教えを忘れているかもしれません。私たちが親鸞聖人の恩徳を知る時は、いのちいっぱい生きている時かもしれません。「忙しい」という字と「忘れる」という字は、漢字の世界では親戚だそうです。忙しいことは結構なことのようにです。商売をしている人にとっては良いことですが、人間にとって忙しいというこ

とは危ない。限りあるいのちをうっかり忘れて、走り回っているかもしれない。そのような中で、「その人を憶いてわれは生き　その人を忘れてわれは迷う」と、金子先生は教えてくださっています。

そして「曠劫多生の縁　よろこびつくることなし」。こんな私が親鸞聖人の教えに出遇って良かった。この喜びは尽きることがない。このように讃嘆されたのが、この歌でございます。

この歌に親鸞聖人の九十年のご生涯が語られています。まず「昔　法師あり　親鸞と名づく　殿上に生れて庶民の心あり　貧道となりて高貴の性を失わず」。承安三（一一七三）年に親鸞聖人は京都の日野の里にお生まれになりました。一一九二年というのは、私が中学校の時に習ったのが「いい国（一一九二）つくった頼朝さん」ですから、鎌倉幕府が開かれた。逆に言えば一一七三年は平家の時代です。平家が隆盛を極めていた時代です。その後、木曾義仲、源頼朝、義経が出てきて、安徳天皇が壇ノ浦で亡くなって平家が滅亡していく。しかし親鸞聖人がお生まれになった一一七三年は、平家の世の中でございました。

親鸞聖人のお父さん、日野有範という方は、一説では親鸞聖人が四歳の時に隠遁された。蒸発されたと言ってもいいでしょうが、家庭から消えてしまわれたのです。亡くなったのか生きておられたのか、そのことは抜きにしても、父であり夫である人が突然いなくなりました。お父さんが突然いなくなってしまうと、家族は路頭に迷っていきます。そして八歳の時に、これもいろんな説がありますが、お母さんである吉光女が亡くなられます。つまり親鸞聖人は八歳のときに両親を失うわけです。

そして兄弟そろって、伯父さんの家に預けられます。これは辛いことでしょう。伯父さんとはいえども、幼い兄

弟が他所の家に預けられるということは、日野有範の家は潰されたのかもしれないし、なくなってしまったのかも知れません。普通なら跡を継いでもいいはずですが。ここにはいろんな状況があったと思います。

このことは、私たちがいのちをいただいて生きていく上で、当たり前のことですけれども、両親を選べないという現実があるわけです。今みなさんの中で、「この人が父で、この人が母で、その子として出会えて良かった」と考える人は幸せだと思います。しかし、「生んでくれと頼んでいないのに勝手に生んで」とか、「なんで俺はこの親父、このお袋の子として生まれたのか」と思っても、自分の思う通りにはなりません。思いに先立って、この身は生まれてきているのです。

親鸞聖人も、もし他の家に生まれていたら、また状況は変わっていたかもしれない。あるいは日野家が平家の味方、平家の仲間であったならば、親鸞聖人の生涯も変わっていたかもしれない。生まれ育った環境、時代背景、何一つ選べない中で、親鸞聖人はお生まれになったのです。そして九歳で出家得度されたと伝えられています。

この当時、九歳で出家というのはほとんどあり得ない。異例中の異例であると言われています。常識的には十五歳です。これは本願寺ではあまり取り上げない『親鸞聖人正明伝』という書物に書いてあるのですが、九歳で得度する時に、やはり比叡山では九歳ではダメだと。それなら百歳になったらできるのかと。百歳になっても分からないことは分からないし、九歳でも分かることは分かる。そんなエピソードが出てまいります。つまり異例中の異例で、九歳で得度されたと伝えられています。

その得度の儀式を行われた方が、慈鎮和尚と伝えられています。慈円和尚とも言います。この慈鎮和尚という

方は、九条兼実の弟さんで、天台座主に四度なっておられる大変な方でございます。九条兼実という方は、ご承知の方も多いと思いますが、法然上人に帰依された方です。法然上人に仏法をわかりやすく説いてくださいとお願いして、『選択本願念仏集』いわゆる『選択集』の執筆を要請された方です。

さて、日野の里から栗田口まで何キロかわかりませんが、時間がかかったのでしょうか。到着が夕暮れになってしまった。だから慈鎮和尚が、「今日はもう暗いから、出家は明日の朝にしよう」と言ったら、親鸞聖人が次のように言ったと伝えられております。

明日ありと 思う心のあだ桜 夜半に風の 吹かぬものは

この歌を本当に親鸞聖人がお作りになったかどうかは置いておきまして、大事なことは「今」ということです。私たちはついつい「明日にしようか」とか「この次にしようか」と、大事なことを先に伸ばしてしまいます。しかしこの歌は、「明日ありと 思う心のあだ桜」ですから、今は満開に咲いている桜の花も、夜に風が吹いて大雨が降ったら、散ってしまうかもしれない。だから大事なことは今ここでしてくださいと言って、夜に得度をされたと伝えられています。

九歳で出家すること自体が異常ですけれども、弟さんたちも全員、出家得度されている。貴族の中で一人が得度するというのはあり得るけれども、家族全員が得度をするということは考えられない。異例中の異例である。そこに日野家に何かあったのではないかという、これは想像の世界ですけれども、何か特別な事情があったのではないかというのが、一つの捉え方でございます。いずれにしても、親鸞聖人は九歳で得度して、二十年間比叡山で修行

されるわけです。

「昔 法師あり 親鸞と名づく」。みなさんご承知のように、得度の時は「範宴」という法名をいただかれしました。それから「綽空」、これはおそらく道綽禪師の「綽」と源空上人の「空」を取られたのでしょうか。それから三十五歳で流罪になられた時に「藤井善信」。これは善導大師の「善」と源信僧都の「信」ではないかと思えます。そして関東へ向かわれる中で「親鸞」と名のられた。天親菩薩の「親」と曇鸞大師の「鸞」です。親鸞聖人は法然上人に出遇われて、本願念仏の教えを受けていかれた。そして最後の依りどころは、天親菩薩の『浄土論』と曇鸞大師の『浄土論註』であり、「一心帰命」の世界に入っていかれたのではないのでしょうか。そこで「親鸞と名づく」と。

そして「殿上に生れて庶民の心あり」。一応は貴族の世界に生まれたかもしれない。殿上人であったかもしれないけれども、両親の事情によって、親戚の家へ預けられて苦労されていく。そこに人間の悲しさ、寂しさ、辛さ、そういうものを肌で感じ取っていかれたのではないか。そういう意味で、殿上に生まれたけれども、庶民の心をしっかりと引き受けていかれた。

「貧道となりて 高貴の性を失わず」。貧道というのは、親戚の家に預けられて、居候して邪魔者であったかもしれない。だから得度をされたのかもしれないし、わかりません。しかしそういう状況の中でも、「高貴の性を失わず」と。この性というのは性分、性格、性質、相性、持って生まれた人間の生き方の一つですね。

さて、親鸞聖人のここまでの生涯で確認してみたいのは、ちょうど親鸞聖人と同じ時期に京都の町で生活してお

られた方に、鴨長明という人がいます。『方丈記』という書物を書いておられます。この記述を通してながら、親鸞聖人の若い頃の環境や生活を確認してみたいと思います。

『方丈記』に安元三（一一七七）年の出来事が書いてあります。親鸞聖人は四歳ですから記憶にはないと思いますが、安元三年四月二八日、大火、大火事です。京都の町で火が出た。そして京都の市街の三分の一ぐら이가焼けてしまったのです。

私がお世話になった先生に、安田理深という先生がいらっしゃいましたが、私が院生の時に先生のお家が火事で焼けてしまいました。隣の家の風呂の火か何かが飛んできて、先生のお宅にあった、それこそ世界で数冊しかないような書物が全部灰になってしまいました。それで後日、後片付けやお手伝いに行っていた時に、先生はこのようにおっしゃいました。「責任は隣の家にあるかもしれないけれども、火が出た家の隣に私の家があったという存在の責任は逃れられないでしょう」と。

鈴木弘という哲学の先生は、火事で本が焼けてしまった時に、腰が抜けたということです。仏教を学んでいるから、諸行無常だから、ある物はなくなると言うけれども、自分が大事に集めてきた蔵書が灰になった時には、腰が抜けてしまうと。それぐらい人間の執着は強い。でも安田先生は、「火が出た家の隣に私の家があったという存在の責任は逃れられない」とおっしゃっていたのを思い出します。

余談でしたが、このように火事というのは何もかも焼いてしまう。これが安元三年に起きた大火です。それから治承四（一一八〇）年には辻風が起きた。つむじ風、竜巻でしょうか。時々あるとは言いがらも、この年に大き

いのが起きて、家の屋根も吹っ飛んでしまった。大きな牛までも、ふらふらと運ばれていってしまった。そういう辻風、竜巻が一一八〇年に起きた。それから養和元（一一八一）年には養和の大飢饉が起きた。その中で疫病も流行って、それで亡くなる人もたくさんいた。

東北地方でも、今回の震災によって行方不明の方がたくさんいらっしゃいます。私の後輩のお寺が遺体の安置所になっていて、すぐ火葬というわけにはいかない。そこにはいろいろな形で発見された方がいらっしゃるわけです。「手足をもぎ取られ海の中へ沈んでいった犠牲者の叫びを聞く」、それを私たちは本当に聞いているかということです。大変重たい問題です。

さて、そういう大飢饉の中で、郊外から焚き物を売りに来っていた。その焚き物の中に、「怪しきことは薪の中に赤き、丹つき、箔など、所々にみゆる木、あいまじりけるを尋ねれば、すべきかたなき者、古寺に至りて、仏を盗み、堂の物の具を破り取りて、割砕けるなりけり」と。焚き物の中に金箔やら漆やらがついている。そういうものが焚き物の中に見えたということです。どうしたのかと尋ねてみたら、古寺、空き寺へ行って仏像や仏具を盗んで、それらを割って焚き物として売っているのです。まさに五濁悪世の現実です。生きていくためには、きれい事ではすまされない現実です。

私たちが仏像といえは、観賞用の仏像もあるかもしれませんが。しかし仏像を踏みつけることができますか。タリバンの人たちは偶像崇拜を禁止しますので、異教徒として仏像を壊すこともあるでしょう。しかし、お寺から仏像を盗んで、割木にして売るといのは、とんでもないことだと思いませんか。そういうことが現実に行われていた

わけです。

また、仁和寺にある隆曉法印という人がお弟子をたくさん連れて、「隠しつつ数も知らず死ぬることを悲しみて、誰もわからない間に多くの人が死んでいくのは堪えられないということで、死体の額に梵字で阿弥陀の「阿」の字を書いて、一人一人供養して回ったというのです。それも四月と五月の二ヶ月です。京都のいわゆる碁盤の目の中を数えただけで、供養した数は四万二千三百あまりだったと。たった二ヶ月で、四万二千三百人の人が亡くなっていたのです。それも京の市街、街の中だけです。郊外も含めたら、もう数えられないというのが養和の飢饉です。覚如上人の『改邪鈔』という書物がありますが、そこに「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいでて魚にあたうべし」という親鸞聖人の言葉が載っています。この親鸞が亡くなったら、鴨川に捨てて魚に与えてくれということです。私は、親鸞さんは何てことをおっしゃるんだろうと。そもそも死体を川に投げ入れて魚に与えるなんて、そんなことが現実的にあり得るのかと思っていました。しかし、『方丈記』を読んでもと、一一八一年というのは親鸞聖人が得度をされる頃ですから、もう記憶にあるでしょう。

これは私の想像ですけれども、日野の里から、京都の街へやってくる間に、鴨川も通ったかもしれません。実際はどうだったかは分かりませんが、当時鴨川は死人の捨て場所であったかもしれない。もちろん路地にもいっぱい転がっている。そして、愛する人から先に亡くなっていく。そういう悲惨な状況です。だから親鸞聖人が、「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいでて魚にあたうべし」とおっしゃったということは、十分考えられるのではないか。当時、葬儀をきちんとしてもらえないのは貴族の部類でしょうから、私はそんなところにはいないよと。名もなき人

たちとともに私は生きるんだという、親鸞聖人の生涯をかけた生き方があったのかもしれませんが。

いずれにしても、京の街は死人でいっぱいであった。そういうことが親鸞聖人の若い頃にあった。そして元暦二（一一八五）年には、京都で大地震があった。私が今いるお寺が、明治二四（一九八一）年の濃尾震災で倒れております。また私の実家のお寺が、昭和二〇（一九四五）年一月一三日の地震で倒れております。その地震で、学徒疎開していた子どもたち八人が下敷きで亡くなっています。つまり地震というのは、想定外云々ではなくて、いつでもどこでも起こり得るのが、この日本の現実です。

それで、一一八五年に大きな地震があった。お寺というお寺がほとんど倒壊してしまう。山は崩れ、川を飲み込んでしまう。こういう恐ろしい状況が続いた。そして「名残」といって、余震が三ヶ月ぐらい続いたと書かれています。

さて、親鸞聖人が育った頃の背景を、少しだけ見てもらいました。これだけの天災が続いたわけです。都が遷都でもしないと、世情はもう滅茶苦茶という中で、親鸞聖人は比叡山へ上られたわけです。これはお叱りを受けるかもしれませんけれども、親鸞聖人が自ら発心して出家得度をされたとは、私にはとても思えないのです。やむにやまれずというか、時代背景というか、家庭の事情とか、いろんな事柄があって、親鸞聖人は九歳で出家されたのではないか。そして二十年間修行に励まれた。その中で、どうしても断ち切れなかった課題が、二つあったのではないかと思うのです。

一つは愛欲、人間の性の問題です。男と女の問題です。もちろん出家の世界はタブーです。しかし親鸞聖人は人

間として、「愛欲の広海に沈没す」とおっしゃっていますので、やはり男女の問題に苦しめたのではないだろうか。

二つ目は、親鸞聖人ともあろう方が、そんな世俗的なことを越えられないはずがないと叱られるかもしれませんが、「名利の大山に迷惑す」とありますように、名利心の問題です。『恵信尼消息』という恵信尼のお手紙の中に、「殿は堂僧であつた」と出てきます。つまり比叡山の常行三昧堂とか、いろんなお堂のお守りをしながら勉強する堂僧です。キャリアかノンキャリアでいうなら、語弊があるかもしれませんが、おそらく天台座主にはなれないでしょう。いくら勉強して頑張っても、自分より後から来た天皇の子息のほうが立身出世していく。どれだけ仏教を学んでみても、執着や名利というものが消えなかった。そういう苦しみがあったのではないのでしょうか。

「己にして愛欲のたち難きを知り 俗に帰れども道心を捨てず 一生凡夫にして 大涅槃の終りを期す」。やはり親鸞聖人は、「愛欲のたち難きを知り」ということに苦しんでいかれたのでしょうか。これも『親鸞聖人正明伝』の中にエピソードとして出てまいります。親鸞聖人二十七歳の時に、比叡山の麓で女性に会うというのです。これは作り話ですよ。とても綺麗な女性に出会った。その女性が「親鸞様、私も比叡の山へ連れて行ってください」と言うのです。親鸞聖人はダメだと断ります。「比叡の山へは男の身でしか入れない。女人禁制である」と。その女性はいいます。「おかしいじゃありませんか。伝教大師ともあろうお方が、『法華経』『涅槃経』をご存知ないはずはないでしょう。一切衆生悉有仏性、この世に生まれた人はすべて仏になる種があると説かれているではないですか」と。女性の問いかけというのは理屈抜き、非常に具体的です。「それならお尋ねしますが、比叡の山の猿や鹿

は、みんな雄ですか」と聞くのです。そんなはず不是吗ね。「なのに、どうして女の私が仏法を聞けないのですか。どうかこの悩める私にも仏法を説いてください」と語るといふエピソードが出てきます。それくらい親鸞聖人においては、女性の問題がどうしても引っかかっていたのでしょう。

親鸞聖人と恵信尼は、途中から離れ離れになり、いろんなことがあったけれども、ともにお互いを尊敬し合いながら、念仏の行者として出遇っていかれたのではないのでしょうか。夫婦というのは、ともに仏法を聞けるかどうか、そこに立てるかどうかということでしょう。

「人間を懐かしみつ　人に昵む能わず　名利の空なるを知り　離れ得ざるを悲しむ」。仏法を聞くということは、本当は名利を絶つというのが聖道の道でしょう。もちろんそういうお坊さんもたくさんいます。名利を絶って、仏陀の教えに近づいて、しっかり修行しておられるお坊さんは、たくさんいらっしゃいます。しかし比叡山の中には、いろんなお坊さんがいたのも現実でしょう。その当時、天台座主になるといふのは大変名誉なことですが、夢敗れて天皇になることができなかったということもあるでしょう。そういう意味で、肉食妻帯を経験していたような人たちが、比叡山に入ってくることだってあり得る。そういう中で、本当に真実の教えを聞いていくとはどういうことか。悩んで苦しんで、六角堂に参籠して、もう本当にこし私の生きる道がないと出遇われたのが、吉水の念仏道場だった。法然上人のもとへ馳せ参じたのでしょう。それもつかの間、たった六年で今度は念仏停止のお達し、承元の法難に遭うわけです。法然上人も親鸞聖人も遠流に処せられました。

今日は、親鸞聖人のご生涯の中でも、ほんの幼少の頃、若き親鸞の悩みの一端を確かめてみました。もちろん全

部ではありませんが、大変な問題を抱えていたのではないでしょうか。

この頃は、原発の問題が大変な問題になってまいりました。あってはならないことが起きてしまいました。やはり原発はあってはならない。放射能を残してはならない。それがいのちを大切にする念仏者の生き方ではないかと思えます。

いただいたお時間が参りましたので、これで終えさせていただきます。今日は私が普段考えていることを、みなさんに聞いていただきました。長時間ありがとうございました。

(二〇一一年一〇月二七日)